HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	キャンパス内のカルト問題 ： 学生はなぜ「摂理」に入るのか?
Author(s)	櫻井, 義秀
Citation	高等教育ジャーナル ： 高等教育と生涯学習, 15, 1-14
Issue Date	2007-12
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.15.1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33015
Type	departmental bulletin paper
File Information	No1501.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

キャンパス内のカルト問題
―学生はなぜ「摂理」に入るのか？―

櫻 井　義 秀 *
北海道大学大学院文学研究科

Cult Problems on Campus
— Why were students involved in the “Setsuri” (Providence) cult group? —

Yoshihide Sakurai**
Graduate School of Letter, Hokkaido University

Abstract — On July 28, 2006 the Asahi Shimbun began to critically report the controversy about the Christian Gospel Mission (called “Setsuri” in Japan), and Japanese belatedly acknowledged cult problems on campus. Jung Myung Seok, the founder of this cult, was internationally arraigned by the Korean police on suspicion of rape of female disciples and he escaped overseas in 1999, finally being arrested in China on May 12, 2007. In Korea and Japan there are allegedly several hundred victims. Providence conducted controversial proselytization on campuses and got approximately two thousand members in Japan. They concealed actual information about Providence in terms of the theology, the founder, and organization and set up various sports and cultural circles camouflaging its missionary work object.

According to the investigation by Asahi News Company, former members of Providence, and the Student Affairs Division of Hokkaido University, Providence has a church in Sapporo and proselytizes on the Hokkaido University campus. Faculty members should realize the fact that students in Hokkaido University are exposed to their masked proselytization. We must also take measures to protect the students’ right to safely study on campus and their freedom of religion.

So far there has been little academic research concerning Providence except for the authors’ report in the monthly Journal “Chuou Kouron,” issued in October, 2006, titled ‘How should we protect students from controversial campus missions.’ I conducted additional research into former members of Providence and herein I illustrate their beliefs and behavior not only for faculty members of Hokkaido University but also for all student affairs officials and professors to understand the actual nature of Providence and the risk of their free campus mission.

The contents of this paper are as follows: Chapter 1 introduces the reports and investigations of Providence. Chapter 2 explains the history and theology of Providence. Chapter 3 analyzes the method of recruitment and proselytization of new members and their daily mission work. Chapter 4 discusses the controversial mission of Providence and its harmful effect on students. The last chapter proposes possible measures to confront the controversial mission on campus.

(Received on 13 May, 2007)

*) 連絡先：060-0810 札幌市北区北 10 条西 7 北海道大学大学院文学研究科

**) Correspondence: Graduate School of Letter, Hokkaido University, North10 West7, Kita-ku, Sapporo, Hokkaido, 060-0810, Japan

1.「摂理」報道と大学

1.1 報道の衝撃と調査

朝日新聞（2006 年 7 月 28 日より 3 週間）は，韓国のキリスト教福音宣教会（日本では「摂理」と呼ばれる）の教祖の行状と大学における勧誘活動を批判的に報道した。「韓国カルト日本で 2000 人」「教祖が性的暴行」という見出しの記事を全国版では社会面トップ，関西・西日本版では第一面にすえたのはよほどのことである。というのも，特定教団を「カルト」と呼ぶことは，社会的逸脱を犯した宗教と烙印を押すことに等しいからであり，従来，センセーショナルな記事を好む週刊誌や月刊誌は別にして，新聞は「カルト」という言葉を用いることにかなり慎重であった。ところが，朝日が摂理をカルトと断定してさしつかえないと判断した。その理由は次の二点にあろう。

第一に，摂理の教祖，鄭明析（チョン・ミョンソク）は韓国警察から信者の強姦容疑等で国際手配を受け，1999 年から海外逃亡中であったが，2007 年 5 月初旬に中国遼寧省鞍山市の別荘などに潜伏しているところを中国公安当局によって逮捕された。日本・韓国における暴行の被害者は数百名を下らないといわれる。日本では被害者の支援者（渡辺博弁護士等）が，2006 年 8 月 10 日に 44 歳の女性最高幹部（韓国籍）が在留資格を不正に得たとして，入管難民法違反罪などで千葉県警に刑事告発した。被害女性による教祖・幹部信者に対する刑事告訴は検討されている段階である。

第二に，摂理は主に大学生を対象に宣教活動を行い，その際，宗教団体としての教義，組織活動，指導者等に関して布教対象者に全く情報を与えずに，様々なサークルを偽装して学生に近づくという布教方法の問題がある。摂理報道では，現在も日本の「五十大学に信者」をもち，「サークル装い勧誘」していると言われる（朝日新聞，2006 年 7 月 29 日付）。正体を偽る布教活動は，統一教会の伝道方法が元信者から告発され，最高裁において違法であったとの判決を得ているとおり（櫻井，2004a），許されるものではない。

ところで，先の 50 大学の中に北海道大学も含まれていた。筆者は早速，朝日新聞大阪本社の広報担当者に電話し，北海道大学の学生が摂理のメンバーであることに係る情報の提供を依頼した。同時に，摂理被害者の支援者にも照会した。その結果，元信者達の証言や情報を集約して朝日新聞が大学のリストを作成したことが分かり，北海道大学に摂理の拠点があったこと（現在もあると推測されること）は明確になった。しかしながら，誰がメンバーとして加入しているのかといった具体的な情報はなく，摂理による勧誘活動に対して学生の注意を喚起する掲示を急ぐようにと学生支援課に連絡した。

その後，筆者は『中央公論』から宗教団体としての摂理を分かりやすく解説するという論説を依頼され，2006 年 10 月号に「摂理はキャンパスの中にいる カルトの被害をどう食い止めるか」を執筆した（櫻井，2006c）。その内容は，主に韓国の摂理批判団体である「EXODUS」，摂理本体のウェブサイト，韓国で数多く発刊されている似而非（さいび）宗教・異端宗教の概説書や研究書（卓明煥，1986）をもとに，摂理の教義や組織の特徴を説明したものである。日本では，摂理に関して，新聞・週刊誌，カルト問題を啓発するウェブサイト等の情報はあっても，学術的な研究が皆無であった。従って，摂理という教団の成り立ちから現在の活動を概説的にまとめた論説は時宜を得たものとみえ，大学の摂理対策にも利用されているもようである。特に，摂理を脱会した学生や社会人達が「カルトからの回復」をめざして自助グループを形成しているが，そこの勉強会でも重宝しているという話を聞いた。その縁で，脱会者の人達と知り合うことになり，摂理の活動実態に関わる情報を提供してもらった。

この度の報告は，2006 年末に関東・関西においてそれぞれ自助グループを主催している世話人の方，及び元信者の方，計 5 名を対象に個人面接とグループ・インタビューをそれぞれ行い，そのデータを元に摂理の問題を考察するものである。筆者は，主として大学関係者に摂理というカルト問題と，この教団に引き込まれてしまった学生達の生活実態と宗教意識を理解してもらい，そのうえで大学として取り得る対策を考えてもらうことを期待している。さらに言えば，本稿が北海道大学図書館の学術情報リポジトリ（HUSCAP）に収録され，ウェブ上で多くの方々の目にふれ，市民の方の関心を呼び起こす

ことにもつなげられたらよいと考えている。願わくは，摂理に関わっている学生が何かの拍子に本稿を読んで，摂理という宗教団体を再考してくれれば望外の喜びである。

実のところ，朝日の摂理報道に接して，摂理をやめた信者は予想外に少なかったらしい。今回の朝日の紙面は異例の調査・告発報道であり，相当な社会的アピールがなされたものと筆者も考えている。しかしながら，なぜ，少なからぬ学生がこのような宗教団体に誘われ，信者同士が合同結婚までしてしまうような閉鎖的集団に身を起き続けるのかという肝心の問題は十分に掘り下げられないままに，教祖の暴行，セクシャルハラスメントというカルトの典型的なスキャンダルが報道のトーンになってしまった。現在も活動を続ける学生・社会人信者の心に届くレベルまで報道が深化していない。その結果，摂理は誤解を受け続けている，受難の時ということで信仰を強めた信者が多いそうである。

いささか結論を先取りする形になるが，教祖と深いレベルで関わったことのない一般の信者は，自身の経験と直接的な信者同士の人間関係に信仰の基礎をおいており，必ずしも教団の提示する救済論や活動計画そのものに信を置いているわけではないのである。従って，筆者が中央公論で書いたような教義への批判的評価や，朝日が告発する教祖個人と教団の裏面を仮に読んだとしても，いっこうに彼等の信仰は揺るがない。信者の日常世界が変わらないからである。この点をふまえておかないと，オウム（アーレフ）信者同様に，非合理的な思考・行動パターンを有する不可解で不気味な人達という認識で彼等を見てしまうことになる。信者の半数は，われわれ教師が教える大学の学生達であり，突き放してよい相手ではない。卒業・修了するまでは，彼等の学業と学生生活の質を大学は保証しなければならないのである。そうであるなら，少しでも摂理の問題を対岸の火事ではなく，キャンパスや学生生活の喫緊の課題として分析し，考察した上で，何らかの対処を考えるべきなのではないか。このように筆者は考え，本稿を執筆した次第である。

2「摂理」の教義

2.1 教団の概要

「摂理」という言葉は，キリスト教において神の経綸（Providence），予定された計画といった意味合いで用いられてきたものであり，特定教団の名称にするのは奇異である。実際，この団体は創設以来，愛天教会（1980），韓国大学生宣教会（1982），世界青年大学生 MS 連盟（1989），国際クリスチャン連合（1996），キリスト教福音宣教会（1999）と幾度も名称変更をしてきた。韓国では JMS（Jesus Morning Star）と一般に呼ばれている。日本の信者が自分達を摂理人と呼ぶが，教団名として摂理を使うことはない。通常は，誤解や抑圧を避けるためということで，組織や指導者の名称すら秘匿している。日本のマスメディアでは摂理として報じられてきたので，本稿でも便宜的に，日本における通称，摂理を用いる。教義は三十講論とも呼ばれるが，摂理はバイブル・スタディと称している。

教祖，鄭明析の来歴や教団形成史については，先に挙げた中央公論の論説に述べておいたので繰り返さない。要点のみ述べれば，鄭明析は 1945 年，現在の大韓民国，忠清南道錦山郡珍山面月明洞（現在の摂理本部所在地）で生まれ，クリスチャンホームで育ち，聖潔教団（ホーリネス）教会の雑役をして暮らしていたとされる。1975-77 年の間に統一教(統一教会）に関わった。そのために，摂理の教義は統一教会の教義とかなり似通ったものになっている。彼が愛天教会を始めたのは，統一教を離れてから 3 年後のことであった。

摂理の教義を理解するためには，統一教会の教義と比較対照することで，独特な摂理史観や人間観が浮き彫りにされる。しかし，本稿では統一教会を問題には取り上げないので，関連書を挙げるにとどめ（浅見，1987; 川崎，1990; 有田，1992; 郷路，1993; 山口，1993; 櫻井，2004b），本稿では摂理の教義のみを説明することにしたい。

2.2 三十講論の構成

摂理は布教において団体の正体を秘匿しているだけではなく，教説それ自体も秘教化している。秘教の含意は，1. 教典（三十講論）が公刊されていないこと，2. 教え方が独特であること，3. 教説が社会に

表 1．講義回・表題・主な聖書該当箇所，聖書解釈の要点，及び，指導のねらい

回	講義のタイトル／聖書の内容	聖書該当箇所／講義の含意・指導
1	ペテロと魚／漁師は魚から銀貨を得る。信奉者の寄進。聖書は比喩で書かれている。	マタイ 17：24 ～ 27 ／摂理独自の聖書解釈
2	日よとどまれ／日中にアモリ人と戦い，勝利する。戦略が大事。	ヨシュア記 10：12 ～ 14 ／限りある時間を大切に
3	エリヤとカラスのパン／からすがパンと肉を運んでくる。堪え忍んで機会を待つ。	列王記上 17：1 ～ 7 ／聖書は神様の心情。異性関係等のチェック。
4	七段階の法則／鉱脈・物理・生理・地理・原理・心理・真理	ヨハネ 1：1 ～ 5 ／世界の階層性
5	霊・心・体の話／人間は肉体・心 (精神)・霊 (霊魂) からなる。	テサロニケ第一 5：23 ／霊の存在を認識できれば，空虚から開放される。
6	比喩 (序論，動物，植物，その他，特別) ／イエスは譬えで群衆にかたる。	マタイ 13：34 ～ 35 ／今こそ聖書の比喩を正しく解釈できる。
7	火の概念／万軍の神の言葉は火である。	エレミヤ書 5：14 ／時代の転換を知る。
8	終末論／主の日は盗人のように来る。	ペテロ II3：10 ～ 13 ／終末とは転換期の意味であり，いつ来てもいいように備えておく。
9	無知の中の相克世界／ヨシア王は神の言葉に従わずにエジプトに敗れる。	歴代志下 35：20 ～ 24 ／第二の使命者としての再臨主
10	異端の概念／反キリスト，偽りものは誰か。	ヨハネ I2:22 ～ 23 ／摂理の異端性の弁護。イエスも最初は異端視された。
11	洪水の裁き／神の子と人の娘が交わると悪に流される。	創世記 6：1 ～ 22 ／摂理の教理に聞き従わないと神様に裁かれる。
12	予定論／神はイエスをおくられること含めて全て定めている。	エフェソ 1：4 ～ 5 ／絶対予定と相対予定。神を迎える人間の責任分担は 10%。
13	中心人物論／イエス・キリストの系図。神から選ばれた人々。	マタイ 1：1 ～ 16 ／中心人物となるものの特徴。
14	復活論／放蕩息子を歓迎する父。離れていた神様との関係性が回復することが復活。	ルカ 15：11 ～ 25 ／イエスの復活は誰かにイエスの霊が臨む。
15	サタン論／イエスに対するサタンの試み。サタンの本体。	マタイ 4：1 ～ 11 ／サタンは身近なものを通して働く。
16	神様の嫌いな性格／神から愛されなかったカインの性格。	創世記 4:1 ～ 12 ／罪や自分の足りなさを自覚させ，模範的生活態度 (従順) を教化。
17	霊界論／天にある型によりて幕屋をつくる。	ヘブル 8：4 ～ 5 ／霊界に 6 種類あり，再臨主を信じると天国に行ける。
18	啓示論／聖書は救い，知恵を与え，教え，誡め，義を薫陶する。	テモテ II3：15 ～ 17 ／啓示を感じなさい。自己判断するな。
19	メシアの資格論／人の子の兆。	マタイ 24：29 ～ 30 ／再臨主の性質。
20	千年王国 (地上天国) ／御言葉に従うものは復活し，千年の間王となる。	黙示録 20：4 ～ 6 ／教祖に会わないと天国にいけない。
21	イエスとエリヤの再臨実相比較／ザカリヤに子ヨハネの役割を御使いが告げる。エリヤの霊とちから。	ルカ 1：13 ～ 17 ／イエスはエリヤ同様，同じ心情をもって，やり残したことを成し遂げてくれる人に再臨する。
22	バプテスマのヨハネとイエスの関係及び使命の比較／ヘロデ王ヨハネの首を斬る。イエスを世に出す役割を果たせなかった。	マタイ 14：1 ～ 12 ／摂理や教祖へ裏切りは，歴史的大罪になる。
23	ユダヤ教とキリスト教の教理比較／栄光の主を十字架につけたを世の支配者を憂う。	コリント I2:8 ／キリスト教には再臨，火の裁き，復活，地上天国がある。
24	二本のオリブの木と二人の証人／証人に与えられた権限。	黙示録 11：1 ～ 6 ／ 物事は全て対をなす。再臨主と再臨主を物質面で支える組織。
25	ひと時ふた時半時／大患難が終わる時の決定。	ダニエル書 12：5 ～ 13 ／教祖の宣教開始時期と合致。
26	創造目的／生めよ増えよ地に満ちよ。全ての生物を治めよ。	創世記 1：27 ～ 28 ／成長した後の結婚。
27	堕落／善悪知る木の実を食べた行為の解釈。原罪の所在。	創世記 2：17 ／原罪は，エバの性的堕落。
28	救い論／主を信じれば家族も救われる。	使徒 16：31 ／再臨主に会ってその御言葉を聞くことが救い。
29	再臨／イエスが弟子の前に現れ，神の国について語り，後挙げられる。	使徒 1：6 ～ 11 ／イエスは地上に人として降臨する。
30	歴史／歴史上の人物は再び現れ，歴史的出来事も繰り返される。	伝道の書 1：9 ／教祖が再臨主であることを歴史の三段階で説明。

表 2．摂理教団の歴史的位置

時代区分	旧約	新約	成約
信仰性	律法	信仰	実践
認識観	象徴	比喩	実体
霊級	蘇生級	長成級	完成級
神と人間の関係性	主従関係 (主人と僕)	親子 (父と子)	恋人 (新郎と新婦)

出典　表 1,2 共に元信者所有のノート・資料より筆者が作成

おいてはもちろん，教団内においても論議されにくいこと，である。

摂理はキリスト教の一教派として始められたのであるから，教典は聖書を参照している。しかし，聖書解釈は独特であり，三十講論の受講が教義の学習に課されている。表 1 に講義回・表題・主な聖書該当箇所，聖書解釈の要点，及び，指導のねらいを書いておいた。指導のねらいとは，学習者に重点的に取得させてきた信仰態度であり，複数の摂理の脱会者の学習ノートや指導案から筆者がまとめたものである。同じ摂理のメンバーや講師であっても，講義の強調点は少しずつ異なる。三十講論が公刊されていないので，このような資料から何が教えられているのかを推測するしかない。

三十講論の論法には次のような特徴がある。

(1) 聖書は比喩・象徴的な文言で書かれていることを指摘し，解釈的理解こそが真理に到達する方法であることを強調する。解釈に必ずしも一貫した方法論があるわけではなく，歴史的資料批判や文芸批評はともかく，キリスト教の既成教派の教説をふまえてもいない。
(2) 1 ～ 5 までの入門編では，聖書の文言を様々に解釈する可能性を示しながら，聖書と人生，真理とをリンクさせ，世界・宇宙の構成についての見解も付加する。
(3) 6 ～ 12 までの初級編において，世界の矛盾や不幸，諸問題を解決するためにメシアを神が遣わすという神の摂理があることを説く。
(4) 13 ～ 20 の中級編では，メシアの来臨の方法や妨害するサタン側の抵抗等が教えられる。
(5) 21 ～ 30 までの高級編において，メシアの資格，特徴が細かく説明され，最終的にメシアが鄭明析に他ならないことを，聖書に記載される数字の神秘学的解釈から示す。

以上の解釈は，聖書の様々な箇所を膨大に引用してなされる。筆者も一応聖書の該当箇所とメッセージを講釈の順に読んでみたのであるが，素朴な疑問を持った。なぜ，聖書を旧約・新約の順で頭から読まないのか（歴史性の認識）。該当箇所以外の部分を含めて，創世記からヨハネの黙示録までの各書をまとまりがある文書として扱わないのか（物語著者への認識）。或いは，キリスト教の基本的概念である神，イエス・キリスト，聖霊，愛，義，教会，信仰といった諸概念ごとの学びがないのか（宗教概念への認識），ということである。

三十講論は，脈絡のないバラバラの聖書解釈を編纂したものでしかないが，聖書やキリスト教に関わる先入見なしにまっさらな頭で読めば，鄭明析が再臨のメシアであることを弁証しているテキスト群と了解されるのかもしれない。摂理のテキストが旧約・新約の聖書テキストとどのような関係になっているのかを示したのが表 2 である。

旧約時代において神は人間の主であり，律法を守ることが求められた。それに対して，新約時代では

神は父として子たるものの信仰が強調された。この対比はキリスト教的であるが，現代が成約の時代，霊位は蘇生・長成・完成と上昇するという言い方は統一教会と共通している。摂理は，成約時代における神と人との関係を恋人（新郎と新婦）に喩えるが，神の愛を恋愛と混同させかねない考え方である。このような比喩による解釈やメタファーを実体的に解釈する志向は随所に見られ，その最たるものは堕落の原因であろう。

2.3 堕落の起源

創世記第 2，3 章において，エデンの園にいるアダムとエバが蛇のいうことをきいて善悪知る木の実を食べ，裸であることを恥じて無花果の葉で裳を腰に巻いたという記述がある。その後，神により，蛇は呪われ，エバには産みの苦しみ，アダムには土を耕すことが与えられ，二人はエデンの園より追い出された。取って食べれば死ぬという神の戒めを破り，善悪知る木の実を食べたために，人類の始祖は楽園の外で死すべきものとなったのである。

ジョン・ミルトンの『失楽園』や福音派には，人間と共に造られた天使が，神に歯向い，サタン（蛇）となってエバを誘惑し，罪を犯させたという考えがある。それが原罪となり，サタンの誘惑に常にさらされることとなった。神はキリストを送り，救済の経綸を完成させる予定であり，サタンと神の両陣営に分かれた戦いが現実の世界や人の心の中にあるのだという世界観もある。しかし，現在の旧約学において，創世記を記述したヤハウィストには＜神 - サタン＞という二元論的世界観はなく，サタンはギリシャ時代以降の観念であるとされる。

摂理及び統一教会の原罪の解釈はこの上をいくものである。禁断の実を食べる行為は性行為であり，サタンはエバと，エバは次いでアダムと性関係を結び，罪を犯した下半身を恥じて腰を覆ったと説く。エバが最初にサタンと化した堕天使と関係を持った。次いで，エバとアダムは成長以前に性交を行なった。元摂理信者のノートによれば，禁断の木の実を食べた時点で，エバは 14 歳，アダムは 16 歳だったという。これが原罪の根とされる。そのため，神はひとり子イエスをメシアとして遣わしたが，人間の不信により十字架で生涯を終え，霊的救いを約束して天に昇った。そこで再臨主が現れ，人類に完全な救いをもたらすという。

このような解釈は現在の聖書学において問題外である。

(1) 実を食べるという言葉に性交の意味はない。
(2) 蛇に賢い動物以上の意味が与えられていない
(3) エバとアダムの年齢等書いていない。
(4) そもそも霊的存在と人間がどうして性交できるのか。

正統な解釈は，善悪知る木が何であるかの特定はできないが，神の戒めに人間が反したことのみ問題にする。それを原罪とするのもアウグスティヌス以降のローマ教会が救済の権限を独占する歴史のなかで生じた概念である。現在の旧約学・哲学的解釈学では，人間が神に反する自由を最初から与えられていたことの意味を問うことにキリスト教信仰の特質を見いだそうとしている（関根，1994：285-370）。

ともあれ，摂理の教義は統一教会にかなりの程度影響を受けたものであるが，統一教会ほどの徹底した救済の論理や方法が構築されているわけではない。これについては，統一教会と摂理の救済論と教祖の権限を比較した中央公論の拙論（櫻井，2006c）を参照していただきたい。神と人間との関係を恋人に喩えたり，人間と堕天使が性行為をもったことを原罪としたりする独特の教説には，教祖と女性信者との性関係が救済論と結びつけられる伏線を感じざるを得ない。

鄭明析は日本をめぐる宣教旅行の際に，説教後ホテルに地域教会から選抜された女性信者を呼び出して，健康チェックと称して性的暴行を行ったと言われる。筆者は，ウェブ上で暴行を受けた元信者の証言を数編読み，実際に経験した信者の話も聞いたが，被害者の二次的な心的外傷を懸念するために，ここでその詳細を記すことができない。

神と信じた男にただ単に暴行されただけという顛末を女性信者は事実として受け止められなかった。それまでの信仰生活に対するコミットメントに応じた何らかの深い教義上の意味があるのではないか，或いは教祖から特別な愛を受けたのではないかと自ら錯誤するか，そう思いこむよう先輩格の女性幹部から説諭されたという。典型的なカルト教団の指導

者による女性信者に対する性的搾取のパターンといえよう（櫻井，2006a:119-124）。

2.4 再臨主の弁証

鄭明析がメシアであるという一点において，教祖の恣意的行為は全て主の御心にかなった行為と信者に認識されるわけであるが，では，摂理は鄭明析をどのようにメシアであると弁証しているのであろうか。

25 回目の「ひと時・ふた時・半時」がそれである。ダニエル書とは，バビロンに捕囚（前 606 年）となったユダ族から選抜された少年ダニエル（神は裁かれたの意）が，王達の試みや迫害に打ち勝つ物語と，老いたダニエルの幻視から構成された黙示文学である。幻視の幾つかには怪物が現れ，聖なる民に大患難を与える。「ひと時・ふた時・半時」の後，裁きが下され，支配者は滅ぼされ，聖なる民が元の地位を回復するという話である。

摂理は，下記のような数字の解釈をなす。

(1) 1 年＋ 2 年＋半年＝ 3 年半＝ 42 ヶ月（太陰暦は 30 日）＝ 1260 日→ 1260 年が大患難の期間（1 日は 1 年に相当←エゼキエル 4：6）
(2) 633 年イスラム教徒によるエルサレム占領，688 年岩のドーム建設開始（キリスト教大患難の始まり）。688 ＋ 1260 ＝ 1948 年はイスラエル建国年。イスラエル民族の肉的開放。
(3) 688 ＋ 1290（ダニエル書 12:11，日を年に換算）＝ 1978 年。第二イスラエル民族の霊的開放。鄭明析が伝道を開始した。だから，鄭明析こそ，再臨のメシアに他ならないという。
(4) 688 ＋ 1335 ＝ 2023 年。神の王国完成予定とされる。

旧約学はダニエル書の成立経緯をかなり明らかにしている。シリア王アンティオコス 4 世によるユダヤ教迫害（前 167 年）に対して，4 年に及ぶマカバイ一族の抵抗運動があり，ダニエル書は 3 年目頃に書かれた。従って，1260 日，1290 日，1335 日というのは，迫害が継続した日数を端的に示すものであり，受難と神への信仰が黙示文学として記録されたのである（木田，1993:23-50）。

このような聖書の学術的理解やキリスト教の正統な聖書理解と照らし合わせると，摂理の計算方法に何の根拠もないことが分かる。しかも，688 年からキリスト教の大患難時代が始まるというのは，イベリア半島や東ローマ帝国がイスラム軍に侵攻されたのは事実としても，キリスト教が宗教制度として確立され，政治・宗教文化の両面で勢力を拡大していった中世がそれ以降始まることを考えれば，大患難とは言い難いのではないか。この種の聖書に記載された数字を元に，教祖や教団の正当性を主張する団体にエホバの証人も加えられよう。黙示文学を現在の政治情勢に合わせて敵を作る陰謀論もある（バーカン，2003=2004）。

以上，三十講論の核心部である堕落論と歴史観の二点において，摂理の理解と聖書学の知見を照合してみた。これは何も難しいことではない。北海道大学図書館の閲覧室で半日もキリスト教の棚に並んだ本を読めば簡単に分かることである。では，なぜ，キリスト教とは似て非なる摂理の教説が学生達に吸収され，信仰されるようになったのであろうか。

結論を先取りすれば，彼等は教義から信仰を得たのではなかった。独特な教えられ方と，教えるコミュニティの教育的効果が絶大であった。この点を次の節で説明しよう。

3. 「摂理」は学生をいかに誘い，教え込むか

3.1 布教の時期と方法

韓国，日本ともに学生への布教方法は似ており，サークルを偽装して対象者が慣れた頃に「バイブル・スタディ（三十講論の学習）」に移行する。「一人が一人を布教しよう」というのが鄭明析のスローガンであり，大学ごとに布教状況・実績を報告し合い，競わせる構造があるという。従って，摂理のメンバーは一年中布教に従事しているわけであるが，合格発表を一人で見にきた高校生への声かけに始まり，入学式が終わって各種サークルによる新入生勧誘の時期までに勧誘攻勢をかける。

勧誘は二人組みで行う。先輩・後輩，男女別で組む。三十講論の二十四講目に「二本のオリーブの木」

とあったように助け合うわけである。大学構内では，「図書館（体育館，生協食堂）はどこですか？」等と話しかけ，好意的に教えてくれる人と知り合うきっかけを作る。地方出身者（知り合いがいない），推薦入学の子（競争でもまれていない）も狙い目で，「バイト一緒にやろうか」等といって，まず友人になることをめざすという。次いで，「バレーボールやサッカー等の運動サークル，コーラス・ダンス等の文化系サークルがあるんだけど一緒にやらない？」と誘う。大学のヨサコイ・サークルにも入り込んでいるらしい。街の中では書店が勧誘の場になりやすいらしく，「料理本コーナーで本を読んでいたら，料理教室に通っているという女性二人組みに話しかけられ，連絡先を交換してしまった」という元信者もいる（20 代女性，10 ヶ月間メンバー）。実際，この女性のために料理サークルが立ち上げられた。偽装サークルは無数にあるといってよい。ちなみに北海道大学の摂理は，「葵」「アクロ」と称されたが，これは拠点となる賃貸のマンション名である。

勧誘マニュアルはないが，先輩のやり方を見て学習するものらしい。相手に合わせて会話する，相手の関心に合わせてサークルを実際に作ってしまう，信頼関係を勝ち得るまで相手にメール・手紙等で頻繁に連絡し，尽くす態度を全うする，等のお膳立ての手際の良さには驚くべきものがある。プロのセールスマンもかくやと思わせるような承諾誘導の技術を駆使するが，彼等は会社のノルマや自分の給与のためではなく，無給・無休で誠心誠意やっているのである。その態度に誘われた学生達は感動する。新入生にとっては頼もしい先輩達であり，「一生懸命に準備していた教員採用試験に失敗して，自分に足りないものは何かを考えていた私には人間修行の場に思えた」（リーダーとして 5 年間活動した女性）。

このようにしてサークルに勧誘された学生・青年はしばらくサークル活動を楽しむ。メンバーが共同生活するマンション等へ出入りし，食事を共にすることもある。スポーツの後一緒に風呂で汗を流し，お互いの背中を洗ってやることもあるという。飲酒・男女交際厳禁ということが大学生や社会人のサークルと違うが，これに意味がないと思うタイプの人は早々にやめる。しかし，とかく遊び・恋愛等々で学生・若者らしさを発揮することにプレッシャーや違和感を覚える真面目な青年には，「居心地のよいところ」でもあるらしい。

「純粋そうな人」に「バイブル・スタディ」への移行がメンバーの深夜に及ぶミーティングで決定される。2，3 ヶ月で移行する人もいれば，3 年経っても移行しない人もいる。摂理はサークルと教会の二重構造になっており，サークル段階でやめた人達は摂理に勧誘されていたとは夢にも思わないだろう。「バイブル・スタディ」と「主日礼拝」に選抜されたものがメンバーとなって，今後は教会生活を中心にして，勧誘のためにサークル活動を推進する立場に立つことになる。最初に誘ったメンバーが「霊の親」，誘われたものが「霊の子」となる。この親子関係の擬制は統一教会に等しい。

3.2 教化の諸段階

摂理の教義を内面化する場面は，バイブル・スタディ，主日礼拝，教会の活動の三領域に分けられよう。伝統的な教会の日曜学校，聖書講座，或いは統一教会のビデオ・DVD 学習（統一教会であることを秘匿した教養講座）や合宿セミナー（団体名と教祖を明かし，メンバーになることを決心させる）とも異なり，摂理の学習は師弟相伝の趣がある。

講師役のメンバーが控える学習室に，受講するものがお茶を自分で入れ，それを持参して講師に正座して礼をつくす。講師は受講者 1 名（霊の親が復習を兼ねて傍で受講することもある）の関心や理解度に合わせて，講師自ら作成したノートでかみ砕いて教えていく。この指導書は自身の受講ノートを元に教祖の説教や自らの学習により作成したものであるが，さらにベテランのメンバーによりチェックを受け，27 講目の堕落論を講義することを 7 年目に許可されたメンバーもいる。

元信者からこの話を聞き取った際に，筆者はこのような念の入った指導方法に感心した。時に，ローテクがハイテクに勝るというのは，教育において当たっているのではないか。

昨今，大学の講義では学生が 1 時間以上も立って講義している教師の面前でお茶やジュースでのどを潤す風景が状態化している。こちらが挨拶しても返答するものはわずか。筆者はわかりやすさを旨に視聴覚教材を駆使し，講義スライドはホームページに毎回アップして復習用に供しているが，この種の工

夫も限界効用の逓減を免れない。摂理は，学習の動機付けや心構えを「型」として教え，チューター制を思わせる個人指導を行っている。ピア・グループ（サークル・教会の仲間）は，学習者が主日礼拝出席の段階に至るまで電話・メール・手紙で学習者を励ます。バイブル・スタディ終了時には，霊の親も駆けつけ，祝福してくれる。信頼関係を構築するまでは学習を開始せず，いったん関係が構築されれば，学習のコンテンツは中身の吟味が十分なされないままに信憑性のある情報として受け取られていく。

ある面で評価尺度（GDP）や履修法（コア・カリキュラム）の厳密化や，FD（Faculty Development 教育方法の開発）による教育技量の向上を図っている大学が太刀打ちできないほど，摂理は「教え込み」の要をよく心得ている。およそ非効率な教育方法や，手間暇かけて人間関係を作り上げる学習に，青年達は「人格」に響くものを感じているというわけである。しかし，教育コンテンツよりも人間関係ベースの教育というのは，幼稚園や小学校教育に近いともいえ，自らの頭で学習内容それ自体を吟味するという大学教育にほど遠いことも事実である。現代の大学教育が取りこぼしている学生を拾っているとも言える。

さらに付言すれば，彼等は頭ごなしに教え込みを図っているわけ（洗脳）ではない。講師は学習者に聖書というテキストと解釈法，及び解釈の大枠を示唆するだけである。けして，鄭明析がメシアであると断定しないのである。学習者が講義内容を自発的に連関させて，この驚くべき内容を説き明かした人こそメシアに他ならないと思いこむよう方向付ける。「講師が言ったわけではないので，伝えられた人は自分が神様に教えてもらったと勘違いする。教えられたものと違い，自分で悟ったものは残るし，真実だという思いこみが増す」と講師役も務めた元信者が述懐する。

3.3 主日礼拝と韓国セミナー

バイブル・スタディを始めた学習者は日曜の主日礼拝・水曜礼拝・早天祈祷会等に徐々に出席を促されるようになる。礼拝の形式は聖歌，鄭明析の説教（かつてはファクス，現在はインターネットで毎日曜受信される），代表者による連絡事項の伝達，昼食会，その後の運動等であり，祈祷の最後に「時代の主の御名によって，アーメン（鄭の名を隠す）」と称える以外はおよそプロテスタント教会の礼拝と変わりない。この主日礼拝出席をもってメンバーとみなされるようになるが，厳密なメンバーシップはない。礼拝や学習会への参加が増えると教会に入り浸り状態になるので，近くにメンバー同士が男女別でマンションを共同で借りて住むことが勧められる。

メンバーの平日のスケジュールは次のようなものである（表３参照）。

およそ寝る時間がない。よって大学の講義中，仕

表３．メンバーの平日のスケジュール

04:30	起床	05:30 のところもある
05:00	祈祷，教祖のビデオ視聴	近隣の信者も来る。朝の会合・打ち合わせ
06:00	解散，朝のサッカー等	２時間近くの運動（鄭明析の好み）
	各自学校・仕事	学生は伝道時間を捻出
18:00	夕食の買い出し，準備	新人を夕食会に招いたりする
20:00	講義（バイブル・スタディ）	ベテランは付き添い。個別学習
23:00	解散後，会合，祈祷会	新人対策の会議（どこまで学習を進めるか）
24:00	条件の実践（祈祷・聖書講読）	霊の親と子，或いは親のみが伝道勝利のために
01:30	就寝	01:00 過ぎでなければ人の出入りがなくならない

出典：聞き取り調査による

事の最中に居眠りは常態化する。共同生活にはプライバシーがないので辛いが，落ち込む暇もないくらいに人が気遣ってくれる暖かい空間でもある。

完全にスケジュールが相互管理された毎日だが，数回のバイブル・スタディを終えたメンバーには心霊復興（信仰の活力を維持・増強する）のために月明洞（摂理本部）ツアーや，宣教旅行途中の教祖訪問等があり，感動的な教祖との出会いを経験しているものもいるようである。身長 160 センチ程のお茶目で歌や運動好きなおじさんという初対面の印象も，皆がメシアと崇める数々の場面に接していくにつれて，疲れを知らぬ説教や運動，黙々と聖地整備作業をこなす姿に感動を覚えるようになるらしい。

「先生を迎えるために教会の基盤を作ろう」が日本のメンバーの合い言葉であったようだが，これは 1960 年代の原理運動（統一教会の教義「原理講論」の信奉者）に参加した青年達の姿を彷彿させる。実際に，教祖は京都大学と筑波大学に報償と激励のため来たと言われる。

3.4 布教活動と脱会

摂理のメンバーの活動は，日常の布教活動（偽装サークル運営と併行）に収斂される。学生は卒業後，教会リーダーという責任者（多数はバイト生活で残りの時間を教会運営に当てる）に就くか，仕事と教会生活の両立ができずに摂理を辞めるものも出てくる。元信者が語る辞める原因は次のようなものである。

(1) 教会生活は肉体・精神の酷使を前提としており，ついていけない人が少なくない。
(2) リーダー経験を積むと，役職者の不正やきれい事を取り繕う体制の綻びが見えてくる。
(3) インターネットや新聞・雑誌には摂理に批判的な報道が大半である。脱会者のサイトに現役のメンバーも反対活動の情報収集に集まる。そこで自分の活動を反省的に捉え直すものも出てくる。
(4) 教祖は海外逃亡中であり，宣教成果は目に見えないままで，年中偽装サークル運営や教会生活の切り盛りに疲れてくる。30 代以降の人生が見えてこない。
(5) 女性メンバーの中には，鄭明析の性的暴行を受け，宗教的意味を強要したり，教祖の恣意的行為を一切認めない教会の体制に失望したりするものが少なくない。

もちろん，朝日の報道にもかかわらず，信仰を守るメンバーが多いのは直近に辞めたメンバーの話からも裏付けられている。彼等の信仰を強化する結束力は極めて強い。脱会の意志を表明したメンバーには，連日，一緒に祈ろうと翻意を促す涙の電話がかかり，帰宅時に玄関先で待っている等，教会の人間関係を清算するには非情に徹するしかないという。

そして，脱会者が摂理批判に回ると，サタンとして攻撃の対象になる。筆者はネット上でしか形跡を確認していないが，背教者への謗り・侮蔑，哀れみ，恫喝等様々である。

4.「摂理」の何が問題なのか？

4.1 社会的規範・倫理からの逸脱

一般に，教義・組織の特殊性，教祖のスキャンダル等においてカルト視される教団であっても，犯罪行為に荷担したわけではない信者の人権には十分な配慮がなされるべきだと考える人は少なくない。オウム真理教（現アーレフ）は，1995 年に地下鉄サリン事件という無差別テロを実行したが，教団関係者の入学を拒否した大学や住民票不受理の措置を行った自治体に対して損害賠償を求める提訴をなし，勝訴した。個人の人権は，蓋然性の低い社会的不安や組織・地域の利害関係に優先するというのが法律的判断である。

この観点に立てば，摂理に対してはなおさらのこと行き過ぎた批判や介入は避けるべきではないかという意見が出てくるものと思われる。摂理がキリスト教としては特異な教団であり，教祖にセックススキャンダルがあるにしても，日本では被害者が加害者を刑事告訴する事件となっていない。布教方法や献金等において統一教会のように違法判決を受けたわけでもない。2007 年 1 月 18 日に韓国人幹部の出入国法違反の容疑で千葉県警が関係者宅を家宅捜索している段階である。

なぜ，思想・信条の自由を最大限尊重し，学術研究に専念すべき大学人である筆者が，法的議論においては判断を留保するべき事件や団体をあえて社会問題化するべきであると考えるのか。

第一に，未だ違法と判定されていない行為であっても，社会的規範や日常生活のルールに著しく反する行為は批判されるべきであって，そのような社会的反応がなければ社会的秩序を維持することができないと考える。司法判断はミニマムの社会的サンクションである。統一教会の特異な布教方法が違法と裁判所で認定されるまでに提訴以来14年を要したが，その間，霊感商法に対しては20年近くマスメディアによる批判が加えられていた。

第二に，摂理の布教方法は擬装サークルを用いるものであり，勧誘されるものの信教の自由を侵害する行為である。憲法第20条第2項には「何人も，宗教上の行為，祝典，儀式又は行事に参加することを強制されない」とある。従って，布教を行う信者には，自身の信教の自由（信じることを人に伝える自由）だけではなく，相手の信教の自由（信ずべきかどうかを自分で判断し，決定する自由）にも十分に配慮した布教行為が義務として課せられていると考えてよい。摂理がこの義務に違反していることは明白である。宗教を説くのであれば，正々堂々と名前を名乗り，教義を最初から明らかにすればよい。迫害を受けるから正体を隠して布教するというのは転倒した理屈である。正体を隠すから批判される。

第三に，摂理の教義や教祖の性的放縦が多くの宗教団体から批判されており，それは正統／異端といった教義論争に加えて，宗教文化の品位を損ねる行為であると言える。

(1) 布教に際し信者に嘘をつかせる宣教のやり方は，信者のモラルを傷つけ，教団組織のためには社会倫理や道徳を破ってもよいという信者の態度を生み出している。
(2) 宗教指導者が未成年を含む不特定多数の女性信者と性的関係を結ぶこと等，合意があろうとなかろうと許されざることである。優越的地位を利用した性行為の強要でしかない。

第四に，オウム真理教を含めてカルト視される教団は日本社会における宗教への信頼性を大いに損ねた。この点は宗教界から批判されてしかるべきと思われる。昨今，社会的モラルを論ずべきところに宗教者が呼ばれず，政治家・評論家が道徳を大いに語る。江原啓之のスピリチュアル・カウンセリングや細木数子の占いが視聴率・部数至上主義のメディアによって，宗教に代わるものとしてテレビ世代に受け入れられている。日本の宗教文化が衰退する大きな要因になった（櫻井，2007）。

4.2 人間関係への嗜癖

摂理の元信者が語る脱会の難しさには，二つの理由がある。一つは，摂理が本当に真理であったら途中で辞めた自分はどうなるのかという不安である。もう一つは摂理なしでは生きられない自分になったという依存の精神状態である。前者はどのような宗教でも信仰を捨てたものが感じる懐疑や自信喪失であろうが，教義を相対化する学習を始めれば沈静化される。ところが，後者はカルト視される教団特有の囲い込みから生じる状態である。

カルトの信者は，1. 教祖（神）と自分の関係，2. 権威主義的な信仰の上下関係，3. 布教対象者と自分との関係（霊を媒介した擬制的親子関係）等において，関係のなかで自己の位置，存在意義を確認する。教祖は取り巻きの賞賛を必要とし，信者は教祖の指導を必要とする。信者同士は同輩に相談するよりも信仰や組織の上位者に指導を仰ぐことが信仰的とされる。信者は導いている相手の救済に全責任を負っているという意識のもと，その人が回心に至れば神が働いたと喜ぶ。逆にその人がなかなか回心しなかったり，教会から離れたりした場合には自分の信仰が足りないと思って，自分を責め続けるのである。このように相手との関係性においてしか自己が確認できないように，信者は方向付けられる。

もちろん，このような関係性に依存する程度や方向性は個人や教団ごとに異なる。1が突出するのはオウム真理教のように自己の覚醒と覚醒を促すグルにのみ関係が絞られる教団であり，2が弱いために信者同士の殺害が発生したりする。1と2が強い統一教会では，2の組織内に官僚制的な階層が生まれ，幹部は一般信者を利用しながら組織を守る。摂理の場合は，偽装サークル運営が活動の大半であるために，3の比重が非常に高い。

学生にとって，入学早々このような人間関係に依存させられることは悲劇だ。自分とは異なる意見や発想を持つ他者と出会うことでこそ自分の枠を広げられる。大学生活の目的は，一に幅広い教養や専門的知識を身につけることであるが，現代の若者組とでも言うべき各種の部活動やサークルにおいて人間関係構築の術を学ぶことも重要である。摂理の信者になると，こうした機会が奪われ，偽装サークルによる布教行為によってしか他者と出会えず，摂理の世界に相手を取り込むことでしか心を割って話し合えない。

しかも，彼等は勧誘の成功／不成功によってしか自己の信仰が組織や仲間内から評価されず，教会成長という組織目標のために強迫的に人に声をかけ，布教する毎日である。一応の目標が達成されても次に目標が提示される。達成できないのは，目標そのものに問題があるからというよりも信仰不足であるとされ，常時睡眠不足のなか，さらに「条件」と称する祈祷や聖書講読等を朦朧とした意識で行う。慢性的な疲労状態に陥り，心身共に疲弊していく。

摂理の教会では濃密そうで，実際には希薄な人間関係が支配的である。共依存に近い特徴として，下記の要素があげられる（シェフ，1999: 168-170）。

(1) 仮面をかぶる。信仰者アイデンティティを呈示し，競い合う。
(2) 相手の理想像を自己へ，自己の理想像を相手に投射する。互いに実像はみない。
(3) 相手を宗教的理想に沿うようにコントロールする。

共依存的状況を愛と錯覚するのは，このような宗教団体であれ，DV 等の虐待を隠蔽する家族・夫婦であれ，変わりはない。まといつかれたり，まといついたりする人間関係への嗜癖を断ち切ったときに，ごく普通の人間関係ができる。信者が脱会を決意してメンバーに告げると，指導者や仲間達は，依存的人間関係から離れていくものに彼等の秩序が破壊されると感じるのであろう。泣き落としでも翻意しないとわかると，脱会後は信仰を続ける摂理のメンバーに一切連絡しないよう念を押すのである。

5．結び

5.1 大学で可能な対策

摂理であれ，他の正体を隠した勧誘を行う諸団体であれ，基本的にキャンパス内勧誘を統制し，トラブルを押さえ込む方策はない。管理統制を強めると，学生による自治の領域が縮小する。キャンパス内勧誘に対しては，学生一人一人の対応能力を高めるしかない。どのような対処方法があるのだろうか。一例をあげておこう。

1)「カルト」予防オリエンテーションの早期実施

入学時のオリエンテーションにおいて，メンタル・ヘルスや各種勧誘に関わる消費者被害防止策の諸注意とともに，キャンパス内勧誘に関わるトラブルの事例や対処方法を新入生に周知させることが重要である。団体名・責任者・活動目的・内容を明らかにせずに教養や人間関係の構築だけをうたう団体の勧誘は拒否するよう指導する。不安なままで相手の言いなりに集会についていったり，セミナーの契約等を結んだりしないようにと。学生相談室や学生支援課がいつでもどのような相談にでも応じることを教えておく。

2）キャンパス内の相談体制の充実

学生にとって最初の相談窓口は，学生相談室とは限らない。クラス担任，指導教員，学生課職員等様々である。その際，学生相談室と連携しながら，問題の対処を図る必要がある。セミナー費用や献金額が学生の分不相応な額であれば（総額数十万円以上），会社や教団と返金交渉の可能性を模索することも考えられる。その場合は，大学の顧問弁護士や消費者被害，宗教トラブルに詳しい弁護士に交渉の代理を依頼することもあろう。当該団体において，学生が性的虐待を含むハラスメント，執拗な勧誘攻勢や団体離脱後に報復的行為を受けているような場合は，警察への連絡も必要になる。今では，警察もカルト問題を認知している。また，勧誘を行う団体がいかなる団体か不明な場合には，筆者が理事を務める日本脱カルト協会（http://www.cnet-sc.ne.jp/jdcc/）や，協力関係にある全国霊感商法対策弁護士連絡会（http://www1k.mesh.ne.jp/reikan/japanese/

index-j.htm）のようなカルト問題に関わってきた団体に照会してもよい。

3）サークル勧誘・イベント等参加のルール提示

新入生歓迎会，大学祭等学内行事への参加，或いは，学内における学生のサークル勧誘においては，宗教団体であることを理由に大学が規制を加えることはない。その代わりに名称と活動目的を一般学生に明示して参画を促すことをルールとして示し，違反した団体には大学学生部が対処する旨を告示し，大学の公認団体・非公認団体含めたサークルの研修会において周知徹底させる。アルコール・ハラスメントやセクシャル・ハラスメントの予防研修と同じ質量で実施されてよい。被勧誘学生の意識を高めることにもなる。

5.2 大学で対処不可能な問題

大学がなし得ることは予防と，トラブルに巻き込まれた学生へのフォローだけである。いったん，信者になってしまった学生に対して翻意を促すことは至難の業である。教師の一喝や善導によって目が覚めるという事態は想定しにくい。先にも述べたように，学生達は救済論や教祖のカリスマに魅了されたわけではない。信者同士や指導者との濃密な人間関係のゆえに信仰を維持している面が大きい。初めて学生と接する教師や大学という組織は，関係の構築という点では最初から負けている。それでも，ある学生がカルト視される団体と関わりを持っていることが第三者の情報により判明した場合にどうしたらよいのであろうか。

（1）周辺的メンバー（勧誘後間もない）と推察される学生に対しては，学生相談室や学生指導の責任者（指導教員等）が，当人を呼んで事実関係を確認し，必要な情報を提供すべきである。サークルを偽装するような諸団体の場合，活動している当人がカルト視される団体に勧誘されたことを自覚していない場合が多い。

（2）中核的メンバー（団体名称や活動内容を承知し，活動が長期に及ぶ）と考えられる学生に対しては，ケースバイケースであるが，学生の保護者に一報して家族として判断するよう求めることも考えられる。最終的に学生の心身の状態に責任を持ち，対処するのは保護者であるが，連絡までは大学の教育的責任ともいえる。多くの親は大学が学生に対してこの種の配慮をなすことを迷惑とは思わないだろう。

（3）このやり方ができない，または通じない学生（保護者も教団メンバー等）の場合には，大学として違法な勧誘を認めていないことをはっきり伝えておくのがせいぜいだろう。

おそらく，大学としてできることはこの程度である。小規模な大学やキャンパスであればともかく，2万人を超える学生を有し，誰でも入構可能な北海道大学のキャンパスにおいて，違法な勧誘がなされていないかと監視したり，疑惑の団体に介入したりすることは現実的に無理である。学生に自衛を呼びかけ，相談業務で備えるしかない。

必死で勧誘する学生も，かつては違法な勧誘を受けた被害者である。そもそも正体を隠した伝道方法なのだから，自分で門をたたき，好きで入ったわけではない。その結果，学生時代や青年期をカルトに費やすことになる。統一教会の場合は，霊感商法の加害者になる。オウム真理教の場合は，殺人事件の実行犯に選抜されるかどうかは紙一重の差であった。運悪く死刑判決を受けるものがいる一方，重大事件には巻き込まれなかったが20年近く信者であるものもいる。彼等は10年前，20年前の北海道大学の学生や大学院生である。

「なぜ，息子（娘）達が入信してしまったのか」と自分たちの子育てを悔いる年老いた親達から話を聞きながら，筆者は大学の責任の重さを痛感せざるを得なかった。信教の自由は，カルト問題において人生のリスクの問題につながる。まずは，大学の教職員にこの事態を知ってもらいたいと思う。

付記

摂理の元信者の方々には調査にご協力いただいた。特に，脱会者支援のサイト（S-Station 途中下車のすすめ http://tochugesha.web.infoseek.co.jp/）

は非常に参考になった。匿名の査読の諸先生，本誌編集委員会の諸先生にもお世話になった。感謝申し上げたい。

参考文献

アン・ウィルソン・シェフ（1999），『嗜癖する人間関係 - 親密になるのが怖い -』誠信書房。Anne Wilson Schaef, 1989, Escape From Intimacy: The Pseudo-Relationship Addictions

有田芳生（1992），『統一教会とは何か―追いこまれた原理運動』教育史料出版会

浅見定雄（1987），『統一協会 = 原理運動―その見極めかたと対策』日本基督教団出版局

郷路征記（1993），『統一協会マインド・コントロールのすべて―人はどのようにして文鮮明の奴隷になるのか』教育史料出版会

川崎経子（1990），『統一協会の素顔―その洗脳の実態と対策』教文館

木田献一（1993），「ダニエル書」B。シュナイダー，高橋虔監修『旧約聖書注解 III』日本基督教団出版局

マイケル・バーカン（2004），『現代アメリカの陰謀論 - 黙示録・秘密結社・ユダヤ人・異星人 -』三交社。Michael Barkun, 2003, A Culture of Conspiracy: Apocalyptic Visions in Contempo-rary America, University of California Press 教分離への異論 : カルト問題における公共性の課題」島薗進編著『講座宗教 9 挑戦する宗教』岩波書店，75-103

櫻井義秀（2004），「世俗化の限界，政

櫻井義秀（2006a），『「カルト」を問い直す』中央公論新社

櫻井義秀（2006b），「「カルト」を問題化する社会とは - 第 1 回 ICSA（国際カルト研究学会）マドリッド大会報告 -」『宗教と社会』第 12 号，97-109

櫻井義秀（2006c），「摂理はキャンパスの中にいるカルトの被害をどう食い止めるか」『中央公論』2006/10，142-149

櫻井義秀（2007），「『現代社会と宗教』を見渡すための 30 冊」『中央公論』2006 年 2 月号，270-283

関根清三（1994），『旧約における超越と象徴―解釈学的経験の系譜―』東京大学出版会

卓明煥（1986），『キリスト教異端研究』，国際宗教問題研究所。（韓国語）

山口広（1993），『検証・統一協会霊感商法の実態』緑風出版